

村研への希望

(仙台) 島田 隆

村研の才十回大会がまわりまわつて仙台で開かれる。この十年間、私も加えてもらつてゐる東北大学の日本経済史グループ全体のことでいえば、岩手の煙山村と諏訪の今井村・岡谷地域の調べに終始したといつていい。思えば、牛にも似た歩みであり、また昨今の村研大会のテーマとも一見かけはなれた内容の勉強であつたが、それも、村落社会の問題を広く歴史的発展のなかでとらえようという私たちなりの考えあつてのことだつた。その間には、この二カ村や、これと関係して宮城県南郷・鬼首などの調査報告が大会にのせられたし、そのほか全国の村落調査の報告が積みかさねられたなかで、鳴子大会でのように村落構造の本質論についての討議もあつた。

その鳴子大会では、具体的な報告とそのあとの抽象的な討論とがかみ合はず(研究通信三〇号、矢木氏の指摘)、折角の機会を惜しんだことであつた。そののちも、村落研究の各部門、各個人の間で、理論と実証をおしつて研究の共通基盤をつくり出すために充分な機会と成果が少なかつたように思う。

そのためか、田原氏の提案(研究通信四二号)なども出てきたと思われる。氏のいう構造論・変動論や組織論・運動論の意味や位置づけについての疑義はあるだろうが、それはさておき、「構造論における社会学の諸概念を一度ゆつくり皆なで再検討する」とこととか、「村落の構造や変動をじっくり見究める」とことを強調する気持には、大いに賛意を表したい。このような仕事は、やはり村落研究の基本になるべきもので、あえていふならば、こんどの大会を含めて今後の基調にしてもらいたい。農民組織なり農民運動なりの客観的研究も、実はそのなかで充分位置づけることができるものと思ふ。

そこで、しかし年一回の大会や年報だけの交換では、村研の基本的課題の追求はなかなかできないであらう。一九五八・九年度事務局の提案(研究通信三〇号)やそれをうけた塚本氏の意見(同三一号)などのように、支部組織やその共同調査の必要性も考えられよう。ただ、科学の一部門においてさえ共同研究はむづかしく、数部門共同の本格的な研究は一層むづかしいであらう。仙台での共同研究(「北上川」)でもその点は指摘できよう。にもかかわらず、いずれは数部門共同の研究こそが期待されねばならず、そのためにも、村落という共通対象を統一的に把握できるようなパイ・スペクテイブをもつた方法論を、各部門での対象分野の事実から組み立て

ることが急務であらう。さきにもべた私の属しているグループもそういうつもりで勉強していることはまちがいない。毎年大会や年報、また通信がこうした方向をしないでいくと、強力をテコになるより運営されることをねがいたい。東北の情況にのみ即した言い方になつたが、実は全国の問題と考へて、私一個の希望をのべたわけだ。